令和5年度新時代の英語教育推進事業

外部講師の先生方による指導・助言

～中学校編～

山形県教育局義務教育課

ご指導いただいた先生方

佐藤　博晴　先生　（山形大学）

小泉　有紀子　先生　（山形大学）

金森　強　先生　（文教大学）

阿野　幸一　先生　（文教大学）

酒井　英樹　先生　（信州大学）

太田　洋　先生　（東京家政大学）

阿部フォード　恵子　先生（CALAグローバル）

青柳 敦子 先生（山形県立長井高校）

吉澤 孝幸 先生（秋田県立秋田南高校中等部）

山口 常夫 先生（東北文教大学）

大山 慎一 先生（東北公益文科大学）

英語教育実践リーダーは、年間を通じて様々な視点から実践へのご指導をいただきました。

指導・助言の一部をご紹介しますので、先生方もご自身の実践を振り返り、授業改善に役立ててください。

必然性のある言語活動

「誰に（と）」「何のために」コミュニケーションを行うのか、生徒は意識できていますか？

「相手に興味をもってもらえるように、〇〇を伝え合う」という言語活動であれば、どんなことが相手に伝われば興味をもってもらえるか、何を知りたいかなどを生徒に問いかけるなど、生徒自身が考える機会を充実させたいですね。

やり取りの充実

先生が質問して、生徒がYes / Noといった単純な応答のやり取りだけになっていませんか？

→「Please tell me.」などで生徒の話を引き出し、必要に応じた支援を行うとよいでしょう。

練習からリアルに

パターンプラクティスに終始していませんか？

→ （例）「三人称単数現在形の文」の練習

クラスメートや学年外の先生について知っていることについて、「使いながら“s”を付けることに気付く」「生徒が表現してみて、必要に応じて指導を行う」など、言語材料についての練習でも、言語活動の目的や言語の使用場面を意識できるようにしましょう。

see TV…?

・「watch TV」を「see TV」と言った場合

→ ALTとのやり取りから2つの違いに気付かせる

「What is the difference?」と言って、ALTにジェスチャーをしてもらう

・「I don't cook.」と「I can't cook.」

→ 料理はできるけれどしないのかなど、さらに質問をする

など、説明以外の方法で違いに気付くような指導も効果的です。

思考・判断・表現の評価①

▲「三人称単数現在形を用いて、あこがれの人物について発表している」

三単現のsなど、言語材料を正しく用いて発表している ＝ 知識・技能の側面

→「…のために、具体的な情報を付け加えてあこがれの人物について発表している」

＝ 思考・判断・表現は、特定の言語材料を指定せずに、目的・場面・状況に応じた内容になっているかを評価しましょう。（話すこと・書くこと）

思考・判断・表現の評価②

三人称単数現在形を正しく用いることができるか（知識・技能）を見る場面も必要ですが、例えば、

① 三単現のsはついているが発表内容がうすい

② 三単現のsは抜けることもあるが発表内容が豊か

これらを「思考・判断・表現」の観点であればどう評価するか、適切に判断しましょう。

メモについて

　メモをもとに話す活動を行う場合は、英文を読む活動にならないよう指導の工夫が必要です。

（例）

・ ワークシートに「・」を打って箇条書きを意識できるようにする

・ 完全な文ではなく、キーワード程度を書くように促す

・ 考えを整理する時間（メモをとる時間）をメモをとれる程度に設定する

「話すこと」について

最初から「英語使用の正確さ」を重視しすぎると、短く無難なやり取りや発表にとどまってしまいます。

→ 「内容」を深めたうえで「正確さ」の指導を行うことで、形が追い付いてきます。

以前学んだ教科書の参考になるページを音読することも、「正確さ」を高める有効な手段となるでしょう。

「読むこと」について

教科書の物語文や意見文のようなまとまった英文では、

・無理に音読させるのではなく、「必要な情報」「概要」「要点」を捉えることを重視

・「How about you?」などの質問で、自分の考えなどを表現することにつなげる

・読んだ内容について感想を伝え合う、英文を引用して自分の意見を述べるなど、領域統合を意識するとinput と outputの行き来が生まれる

などを充実させていきましょう。

input と output

① output のためには、十分な量の input が不可欠

・特に、「音声」でのinputを大切にする

・先生が様々な場面や文脈の中で、くり返し同じ表現を用いる

② input と output の往来が大切

・output することで、「言いたいけれど言えない」というギャップが生じる

・inputに戻ることで、「こう言えばいいのか」という気付きが生まれる

中間指導について

① 先生が常に目標を意識した指導を行うことで、生徒も目標への意識が高まる。

（例） 本時の目標が、発表の「内容面」に関すること

→ 中間指導では、「正確さ」よりも「内容面」をふり返る

② 生徒が発言したり考えたりする機会を確保する。

（例） 「どんな内容があるとよいか」を生徒に問いかける、各々教科書を参考にする時間、モデルとなる生徒の発表 など

学び方の自覚を促す

例えば、中間指導やふり返りで、

「目標を達成するために何が役に立ったか」

「友達のどんな良いところに気付いたか」

などの観点からフィードバックを行うことも、生徒が「学び方」を身に付けていくうえで効果的な方法の一つと言えます。

生徒の主体性を育む視点

① どのような活動を行うか

生徒にとって必要感のあるコミュニケーションを行う目的や場面、状況を設定

② どのような支援を行うか

中間指導で、目標や目的に向けて生徒が考える機会を確保

③ どう見取るか

学びの経過を見取る、ふり返りを工夫する　　など

Ask me!

授業では、教師が質問して生徒が答えるという形になりがちです。

→ 教師が「Ask me!」と問いかけるなど、生徒からの質問を促す

生徒同士で質問したりする機会を設ける

などの指導を行いながら、やり取りを継続する力を育みたいですね。

「指導・助言　～小学校編～」も、授業改善のヒントになる内容がたくさんあります。

小中連携の観点からも、ぜひ参考にしてください。